東京大空襲と集団疎開

吉原茂夫（習志野台・53歳）

大東亜戦争（第二次世界大戦）が始った時、私は満五才であった。茶の間で母が「アメリカとの戦争が始まったのよ。」と私に言ったのを、その場面だけ今でも覚えている。当時、私の家族は、東京市（今の東京都）目黒区三田に住んでいたが、国民学校（小学校）入学前の東京での記憶はこの件と、入学前に床屋で丸刈りにされた時のこと、バス通りを歩いていた時に、よその小父さんの自転車と正面衝突して、額に大怪我をして手術を受けた時のこと位であるから、幼な心に「戦争になった。」ということが、大きな衝撃であったからか、或いは、その後の戦争中の出来事との関連で記憶に残ったのであろう。

国民学校では、よく「東条英機総理大臣」のことを聞かされていた。例えば「幼い時から賢かった。」「陸軍大将になるまでの人並み以上の努力、鍛練を積んだ人だった。」というものであった。また、式の際には「教育勅語」を聞かされた（勿論、内容は理解できなかったが）。そして、「宮城遙拝」（皇居の方向を向いて拝礼する）を毎朝させられたように記憶している。校長室の隣には「御真影室」があり、天皇の御真影（写真）が祭られていると聞かされていた。当時は、天皇は「現人神（あらひとがみ）」だと聞かされ、写真を見ることすら、おそれおおいことで、勿論、私達は見たことはなかった。

「献納」という言葉も、鮮明に記憶に残っている。その時は勿論、充分に理解していたわけではないが、飛行機や武器を作るための金属類が不足してきたので、軍が国民に金属類の供出を指令するに際して、「献納」という言葉を考えたのであろう。私達が着ていた国民服の「金ボタン」も献納の対象になり、学校で黒いガラスのボタンと交換させられた。

ラジオや新聞のニュース、また父がよく連れて行ってくれた、映画の前に上映されるニュース映画でも、「皇軍（日本軍）は敵を撃破しており、日本は必ず勝つ。」と報道されていたが、既に、戦況は悪化し、武器が不足していたのであろう。

近所の小父さん達の「出征」（兵隊となって戦場などへ出向く）の見送りに、山の手線の「恵比寿（えびす）駅」まで何度か行った。「慰問袋」もよく廻ってきていたし、「千人針」（兵隊さん達の武運を祈って、一人一針の刺繍をリレーするもの）に母達が協力しているのをよく見たものだ。

その内、東京上空にB29が現われるようになり、警戒警報や空襲警報がよく出るようになった。学校では、空襲に備えて、机の下に屈んで、両手で耳と目を覆う訓練がよくあったし、毎日「防空頭巾」を持って通学し、授業中に警戒警報が出ると、一斉に頭巾を被って、走って帰宅となる日が多くなり、空襲警報が続けて出ると、学校に缶詰めになった。私の家は、

学校から少し離れていたので、帰宅途中に空襲になり、見知らぬ人の家の軒下に避難したことも度々あった。父の話では、海軍の研究所が近い所にあり、ここが早くから狙われていたようである。

B29は、初めの内は「銀色の豆粒」位にしか見えなかったが、次第に高度を下げて来るようになり、四つの発動機（エンジン）が判る位の高度で、平然と飛ぶようになった。高射砲の弾がなかなか当たらないからだと、中学生の兄が言っていた。B29に「零戦」が体当たりするのも何度か目撃した。勿論、体当たりした「友軍機（日本機）」は、火の玉となって落下してゆくが、B29は発動機の一つに体当たりされても、すぐには落ちず、煙を噴きながら東京湾へ逃げて行くのを見て、子供心に悔しいと思ったものだった。

爆撃は日中だけではなく、夜間にも無差別に行われるようになったが、その最たるものは、「三月十日の東京大空襲」であろう。B29の大編隊の轟々たる爆音、幾本もの探照灯の帯、そして、町が燃え上がる真っ赤な炎と煙で空が明々としていたのが、目黒からでもはっきりと見えた。これが、私の見た空襲の最後である。このような激しい空襲を受けても、軍の発表はいつも「敵には大損害を与えた。我が方の損害は軽微なり。必ず鬼畜・米英を駆逐し、大東亜共栄圏を作り上げるのだ。」というようなもので、私達は、それを疑うことすら知らなかった。

集団疎開がいつ頃から始まったのか、私達は知らなかったが、次代を担うべき子供達を守ることと、空襲の際に、足手纏いになる小学生達を都会から避難させようとの考えであったのであろう。当時、皇后陛下の作詞として「次の世を担う身ぞ、逞しく…」という一節を、よく聞かされたのも覚えている。

昭和二十年三月二十四日、私達は二年生三学期の通信簿（成績表）を貰うはずであった日に、あたふたと「集団疎開」に出発した。目黒駅に集まり、各々の家族と別れを告げた。泣き出す児童もいたが、先生は「そんなことで、戦争に勝てるか！」と叱りつけるのみ。当時は何かにつけ、「男の子は強くあれ」といわれ続けられていた。私には、七才上の姉が見送りに来ていたが、何故か、姉に手を振ることができず、姉の顔がよく見えないような振りをして、そのまま電車に乗り込んだ。

目的地は、福島県南白河郡矢祭山の駅前にある「矢祭館」という旅館で、ここが、新三年生の私達の合宿所であり、教室でもあった。二才上の姉は、少し北の「磐城塙」という所へ行った。私の兄弟は七人であったが、集団疎開したのは、この二人だけであった。中学生・女学生の兄姉、三才と一才の妹と弟は、両親と共に残ったのである。

矢祭山へは、上野から東北本線で郡山へ行き、水郡線で南下するルートであった。これは、敵の艦載機による攻撃や、洋上からの艦砲射撃を避けるため、常磐線経由のルートを避けたのだと聞かされた。空襲慣れしていたとはいえ、艦載機による機銃掃射の怖さは聞かされていたので、遠足気分にはなれなかった。

矢祭山での食事は、「水とん」（小麦粉のだんご）を主にしたものであった。おかずの調達には先生方も苦労されたのであろうが、私達も「イナゴ」や「沢ガニ」取りを度々した。イナゴは与えられた紙袋に一杯取って帰らねばならなかったが、私は、イナゴを摑むのが苦手で、いつも泣く思いであった。

食料不足でいつも空腹であったが、ある日、イナゴ取りの帰り道に何人かの友と、干してあった蕎麦を手折って食べたのを、お百姓さんに見つか

り、担任の成瀬先生のビンタを二発食らった。先生は、殴りながら涙を流しておられ、私達は「お国の非常時に悪いことをしました。今後は、お国の為、人の為になる人間になります。」などと先生に誓って許して頂いた。

父からは、時々手紙が来ていたが、六月に来た手紙で、目黒の我が家が五月二十五日の空襲で全焼したことを知って、悔しい思いをしたのを覚えている。ただ、家族全員が怪我もなく、無事でいることを知り、先生からも「良かったな。」といわれホッとした。三月十日の下町大空襲を遙か彼方から見たことはあったが、身近での火災は見たことがなかったので、我が家が全焼したことを知らされても、その時の悲惨な大混乱の状況を、思い浮かべることはできなかった。私の家の裏隣は、「強制疎開」で既に壊されていたが、この程度のことで、延焼を食い止めることは不可能であったのだろう。

矢祭山付近の静かな山村地帯には、敵機は飛んで来ないものと思っていたが、六月か七月頃に、近くの「常陸大子（ひたちだいご）」の駅で、ホームに居た駅員が、敵の艦載機の機銃掃射を受けて即死したという話を、先生から聞かされた時には、何かゾクッとするような恐怖感をもった。

そうこうするうちに、遂に「八月十五日」がやってきた。先生の指示で全員がラジオの前に座り、「玉音放送」を聞いた。受信状態が悪く、よく聞き取ることができなかったし、内容も部分的にしか理解できなかったが、あとで先生が説明してくれた。その時、先生は男泣きに泣きながら「残念だ。」という意味の言葉を発して居られたように記憶している。私達も、戦中の教育を受けてきたわけであるから、戦争に負けたということを悔しく思ったが、それよりも、家族の元へ帰ることができるという喜びの方が、大きかったように思う。

いよいよ帰京の日が来たが、客車は戦災で激減していて、私達は、夜行の有蓋貨車に押し込められて、郡山経由で帰った。郡山駅で列車を乗り換える時、進駐軍の兵隊を見た。何人かが「アメリカ兵だ。」というと、先生に「聞こえると大変だから静かにしなさい。」といわれた。背が高く、大きな目をしていて、恐しく感じたのも「鬼畜米英」と教育されていたからであったと思う。

帰京した日は十月二十七日、私の満九才の誕生日であった。半年振りに見る東京は、一面の焼け野原で、目黒の家のあった所も、瓦礫とバラックとささやかな野菜畑があるだけだった。私は父に連れられて、家族の寄留先であった「千葉県千葉郡津田沼町久々田（くぐた）二五三」（現在の習志野市津田沼二丁目）の「第三青雲寮」に帰った。どこかの会社の独身寮であった建物を、若干改造して、かなりの家族が住んでいた。風呂は無く、舎監の家の前のドラム缶が共同の風呂であった。食料も不足しており、よく父や兄と一緒に、京成電車で佐倉方面へ買い出しに行った。殺人的な満員電車で、時には満員以上に乗るために、板張りの座席の上に土足のまま二列に立ち並んだりした。帰りの電車に飛び込み自殺があり、動けなくなって、上り線の電車を並行に止め、ドアからドアへ乗り移って帰宅したこともあった。

この津田沼で、一年後に母を亡くした。腸捻転であったが、我慢強かったために手遅れであったと聞いた。母は千葉医大（今の千葉大医学部）まで、近所の小父さん二人が自転車で引くリヤカーで運ばれて行った。石コロ道を苦しみながら何時間も耐えて入院したのだが、その間、病状は相当に悪化してしまったのであろう。一昨年、献血のため四十余年振りに千葉大付属病院へ行ったが、母の苦しみを思い、目頭が潤んで仕方がなかった。

翌年（昭和二十二年）春、一家は祖母の住んで居た関西へ引っ越したの

で、津田沼での生活は、二年足らずで終った。聞きづらかった千葉弁にやっと慣れたと思ったら、今度は関西弁に面喰うこととなった。

昭和五十年末に、習志野台に転居して来てすぐ「久々田」を訪ねた。二十八年の間にすっかり変わっていて、以前の住所の場所を確認することはできなかったが、道行く老人に「久々田」と聞いたら「この辺りが久々田でしたよ。」と教えてくれた。故郷へ戻って来たような感慨を覚えると共に、戦中・戦後の様々な出来事が、走馬灯のように思い出されるのであった。

現在の「平和と自由」は、こうした様々な悲惨な出来事を経て得られたものであることを、当時幼なかった体験者の一人として、家族や若い人達に伝えておきたいと思い、書き綴ってみた。

